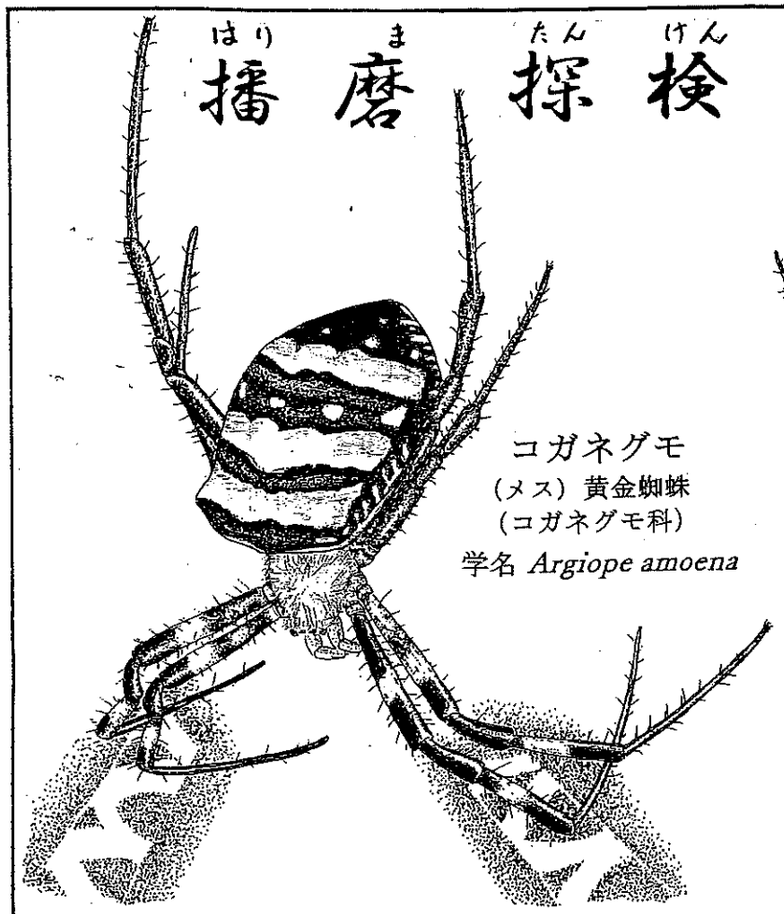
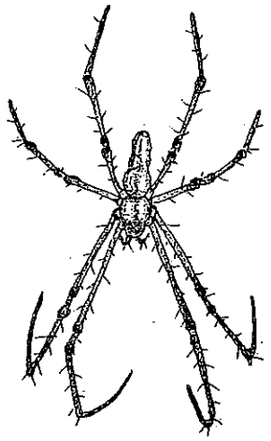
播磨探検（はりまたんけん）

2021.8.7 309号
文と写真 赤松弘一



コガネグモ
（メス）黄金蜘蛛
（コガネグモ科）
学名 *Argiope amoena*



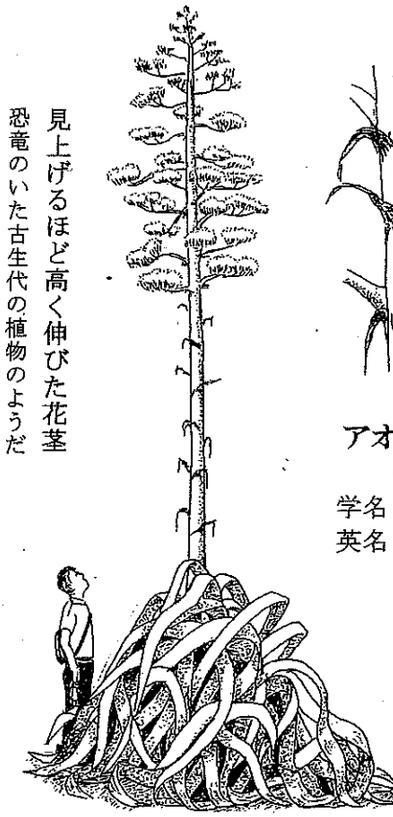
コガネグモのオス
体長はメスの約5分の1

コガネグモに食われた
コガネムシの亡骸

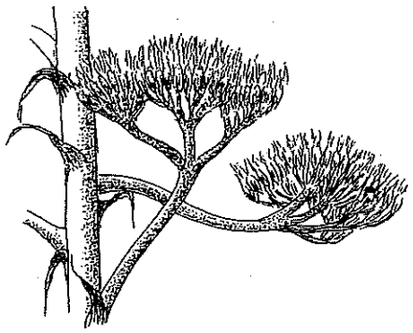
7月中旬、激しい雷雨の日が数日あり、その後17日に梅雨が明けた。その後は7月末まで雨の無い酷暑が続いている。乾ききった学校の中庭にコガネグモが巣を張っている。ひと月ほどの間にずいぶん大きくなった。黄色と黒のトラ縞の腹部が大きいこの個体はメスである。巣の下のツツジの葉の上には緑色のコガネムシのバラバラの死骸が、見えるだけでも4匹分ほど転がっている。巣の主が網で捕らえて体液を吸い尽くした残骸だろう。コガネグモがコガネムシを食う。名前はかぶっていても類縁関係はないので容赦なくエサにされてしまう。夏の終わりには産卵するために、メスは多くの栄養分が必要なのだ。すぐ近くには小さなクモが巣を作ってやはり逆さまになって真ん中に納まっている。おそらくこれはコガネグモのオスである。一般にクモはメスがオスに比べて大きい（徘徊性のハエトリグモなどではそれほど差はない）が、コガネグモの仲間ではそれは特に顕著である。メスは圧倒的に大きくオスは網に絡まったゴミのように小さい。

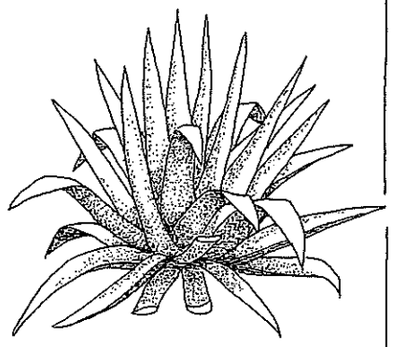
メスは次世代の卵を産まねばならない。卵には体を作るための材料一切が含まれており ある程度の大きさが必要である。そのためメスは体も大きい。それに対してオスは遺伝子という設計図を精子という形でメスに渡すだけである（と言ってもこれが命懸けで、多くのオスはメスに食われてしまう！）。つまり、メスはモノづくりの原材料や容器や器具一切を用意しなければならないが、オスはUSBメモリー1つだけでいいのだ。そしてオスは小さい体を活かして、木の枝の先から糸を風に流し、それに乗って遠くまで移動できる。その結果より広い地域に繁殖域を広げられるのだ。体の大きいメスにはこれはできない。「オスは精子の運び屋として、メスは卵の生産工場として存在している」というのは、あまりにも命に対して乾いた見方か。

最後にひと花咲かせたドラゴン



見上げるほど高く伸びた花茎
恐竜のいた古生代の植物のようだ

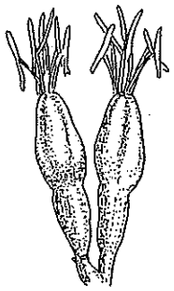




普通の状態の
アオノリュウゼツランの株

アオノリュウゼツラン 青の竜舌蘭
（リュウゼツラン科）
学名 *Aagave Americana*
英名 センチュリー プラント

テキーラというメキシコの有名な蒸留酒はリュウゼツランの株の樹液を発酵させてつくられる。



花と雄しべ

7月の最終日曜の朝刊に「高砂市でリュウゼツランが開花した」という記事が載っていた。リュウゼツランはアロエのような肉厚で棘のある細長い葉を広げる植物で、30年から50年に一度だけ花を咲かせて、その後枯れてしまう。開花が珍しいので時々新聞の地方版に載るのである。「ほう、咲いたか」と読み飛ばそうとして、それが私の住む高砂市であるとわかったので、朝食後すぐに見に出かけた。

高砂の古い町にある松宗蔵という江戸時代の土蔵と堀の間にそいつはそびえ立って生えていた。黄色い花の束をつけた花茎は太さ約15cmで9m近い高さになり、竜舌蘭の名の元になった竜の舌のように細長い葉はその根元で萎れかかっている。開花を見るのは初めてである。夏の青い空を背景に枝を広げた黄色い花は見事に美しい。下の方から花は咲くようで、花茎の上部はまだ黄緑色のつぼみである。今回花を咲かせたのはアオノリュウゼツランという種で、メキシコが原産である。乾燥や高温そして寒冷にも強いという。

数十年に一度花が咲いて、その後枯れてしまう植物といえばタケ（竹）が思い浮かぶ。タケは草か木か不思議な植物だが、木（木本類）は花が咲いて実ができても枯れることはなく、何年も繰り返し開花し実を結ぶ。一度の開花で枯れるリュウゼツランはそういう点でも草（草本類）だといえるだろう。花茎には非常に多くの花が咲くが、実を結ぶのは1割程度らしい。翌週見に行くと、たくさんの花が実を結ばずに落ちていた。枯れかけた株の付近の地面には小さな株が出ていた。種以外にも子株を作って子孫を残すようだ。

何十年もの間沈黙し、ひたすら葉に栄養分を蓄えて、やがて一気に花茎を伸ばして実を結んで枯れるという生き方は、セミの一生に似ていなくもない。私も残された人生を考えるとき「最後にひと花咲かせたいもんだ」と思う。どんな花だ、実はなるのか？